

寅さんとイエス
一逸脱にみる道化の姿一

奨励	米田 彰男【よねだ・あきお】
奨励者紹介	カトリック司祭 清泉女子大学教授

一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。

(エフェソの信徒への手紙 4章2―3節)

イスラム教の教授である富田先生（愛光高校時代の同級生）の紹介かと思いますが、生まれて初めてプロテスタントのチャペルでお話しする機会が得られ、心から嬉しく思っています。博士論文の指導教官であったフランス人のティヤール先生が、エキュメニズムのカトリック側の第一人者（第二ヴァチカン公会議にも影響を与えた人物）でしたので、東方教会と西方教会、あるいは西方教会に属するカトリックとプロテスタントの一致のために、少しでも役に立てればと、常日頃願っていたところでした。

春学期統一テーマが、エフェソの信徒への手紙4章2節の「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい」という言葉だそうです。ここで寛容と訳されている「マクロテューミア」というギリシア語は「怒らないで長く我慢すること」です。ところで、今日の話のテーマである、寅さんとイエスはどうでしょう。怒らないどころか、怒るイエスはマルコによる福音書において重要なテーマです。宮瀬め事件では、神殿でイエスは怒り、両替人の机や鳩を売る者の椅子をひっくり返します。寅さんにおいては、古里柴又の「とらや」の台所で、しょっちゅう怒り、暴れています。人間として当然正しいことを正しいこととして生きる時、「怒り」はしばしば込み上げてきます。

『寅さんとイエス』（筑摩書房 2012年）という本を書きましたが、幸い多くの新聞が書評を書いてくださり、今も第8刷が大型書店に並んでいます。プロローグで述べておいたのですが、寅さんもイエスも、全体を丸ごと捉えることが大事です。第1作のはち切れんばかりの寅さん、押さえても押さえ切れないエネルギー、常識のみ出しに顔を背ける人もいるでしょうが、その人が第1作だけでなく、第48作をも観たなら、あれっと思うことでしょう。どちらも渾美清演じる同じ寅さんです。イエスについても同様です。イエス全体を丸ごと捉えることが大事です。しかし、その作業は寅さん以上に困難を極めます。イエス自身は何一つ書き残さなかった。とてつもない大物は文章を残しません。ソクラテス然り、孔子然り、イエスもまた然りです。しかしその記憶は、不思議なことに弟子らによって伝えられ今日に至っています。

全体を丸ごと捉えること、それはちょうどラッキョウを丸ごとかじる如くです。東大で解剖学を講義しつつ、癌のため若くして亡くなった細川宏の詩に「ラッキョウ」と題するものがあります。

ラッキョウはうまいね
一粒ずつ箸につまんでカリッと咬むと
甘ずっぱい独特の味と香り

猿にラッキョウの実をやったら
一枚一枚皮をはいで
とうとう何んにも無くなってしまったとき

しかしわれわれ人間だって
真理をあばき出そうとして
真理の皮をはいで捨てるのは捨てる
いつか真理を見失っているのかも知れないよ

もう一度ラッキョウの甘ずっぱい味を
ゆっくり噛みしめて味わってみようや

「ラッキョウ」という詩は、『病者・花』（現代社 1977年）と題する詩集に含まれていますが、これは癌との闘いの日々、見舞い客から贈られた花の一つひとつに詩を作ったもので、実にユーモアに満ちあふれています。彼が亡くなる1カ月ほど前に残した以下のメモは、まさに寅さんとイエスの生きざまに通じるものがあります。

- 一、一日一日をていねいに、心をこめて生きること
- 二、お互いの人間存在の尊厳をみとめ合って（できればいたわりと愛情をもって）生きること
- 三、それと自然との接触を怠らぬこと

「人の世」（前掲書）

ところで、あのフーテンの寅さん、本当に「一日一日をていねいに」生きているのか、と首をかしげる人もいるでしょう。第31作「旅と女と寅次郎」で、「明日、忙しいんじゃない」と問う、妹さくらの息子満男に対し、寅さんは「安心しろ、他の人になくて俺にあるものと言えば、暇だよ」と答えています。

暇を埋めることこそ一日をていねいに生きること、と現代人は思い込んでいますが、実は暇こそ一日をていねいに生きることであるという逆説のなかに、我々が見落としてきた真実が隠されているのではないのでしょうか。

暇といえば、山田洋次監督と関田寛雄牧師の以下のような対談があります。「『寅次郎サラダ記念日』で、小諸の駅でおばあちゃんに、次のバスはいつ着くかと聞くと一時間先だとされる。『まあいいが、俺の持っているものは暇だけだから』と答える。そして暇なら家に来ないかとおばあちゃんから誘われると、『俺はこう見えても忙しいんだ』と言う（笑）。楽しいですね。結局、その夜、おばあちゃんの家に泊めてもらって、楽しい一時を持ち、その（おばあちゃんの）入院のために奔走する。牧師も一人を追いかけることを、寅さんに学びます。それが羊飼いでないかと思いませんか」に対し、山田監督が「そのためには、暇でなければなりませんね。（笑）」（『信徒の友』日本キリスト教団出版局 2001年5月号）と述べているごとく、寅さんと暇とは密接に結びつきます。

さて、ここで大切なことは、根っから若きマドンナが好きな寅さんは、「家に来ないか」というおばあちゃんの誘いを、一旦は「俺はこう見えても忙しいんだ」と断ります。しかし、おばあちゃんの一瞬のまなざしのなかに、言い知れぬ深い孤独を寅さんが読み取ったということです。他者の必要を察する心、まさに現代人が忘れかけている心です。バスや電車の中で、携帯に、そして自分の世界にふけっている人のいかに多いことでしょう。

イエスについての重要な風評があります。マルコよりは幾分静かで落ち着いた、上品なイエスを描く傾向にあるルカとマタイのみが書き残している、いわゆるQ資料に基づく風評です。マルコの「怒るイエス」など削除する傾向のある両者が、あえて記しているスキャンダラスな風評ゆえに、イエスの生きざまを知る上で、信憑性があります。その風評とは、「大飯食らいの大酒飲み、取税人や罪人の仲間」（ルカによる福音書7章34節・マタイによる福音書11章19節）という、イエスに関するスキャンダラスなものです。

イエスの生きた社会において「清さと汚れ」の領域の問題に、敬虔な義人たちは神経を尖らせました。そして、その「汚れ」は外から人間に付着するものと考えました。取税人、遊女、罪人などの不浄の人と同席すれば、当然伝染して、自らも汚れると思いついていました。イエスは、そうした当事の常識や掟に対し、一緒に食事をして汚れるような汚れた人間など、一人もいないことを身をもって示したのです。そして、社会から除け者にされた人びとと食事をするイエスの行為を批判する、いわゆる義人たちに対し、イエスはきっぱりと言いつつ、「取税人や遊女の方が、あなたたちより先に神の国に入る」（マタイによる福音書21章31節）と。

要するに、寅さんの常識の逸脱も、イエスの常軌を逸した掟破りの行動も、その根底には他者を生かすための他者への思いやりであり、表層の嘘を暴き、真相を露（あらわ）にする、道化の姿があります。寅さんの無様な姿を見て、俺はあれよりはまだまだ、と何となく自らを慰める人も多いでしょう。しかし、あの無様な振舞いの中にこそ、神の心（それすなわちイエスの心）の痕跡をみると言っても過言ではないでしょう。しかもその背後には、常に笑いとユーモアがあり、明らかな雰囲気は漂っています。